

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 12 日現在

機関番号：32698

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2014～2016

課題番号：26370676

研究課題名(和文) 英語時制・相の実証的研究 動詞の概念とスキーマの再構築および視聴覚教材の開発

研究課題名(英文) An Empirical Study on English Tense and Aspect --- Reconstruction of Verb Concepts and Their Schema and Development of Audiovisual Teaching Material---

研究代表者

高橋 千佳子 (TAKAHASHI, Chikako)

東京純心大学・看護学部・教授

研究者番号：80350528

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,500,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、日本人英語学習者が母語との違いを理解しながら英語の時制・相を習得できる動画教材を作成し、その教材を用いた教授法を開発して従来型の授業と比較することで効果を検証することを目的とした。英語の進行形や完了形は「相」と呼ばれ、時制の中でどのように状況を捉えるかを示している。動詞の種類によって振舞いが異なる上、日本語「～ている」の影響があり習得が難しい。まず文献調査で国内外の時制・相に関する研究を概観し、英語進行形の動画教材を作成した。次に実践授業で効果を検証し、被験者である学生からのフィードバックをもとに修正して教材を完成させた。また、定期的に海外の学会で発表してアドバイスを得た。

研究成果の概要(英文)：This study aimed to develop audio-visual teaching materials and a teaching method for English Tense and Aspect for Japanese learners of English, while measuring its effect by comparison with a conventional teaching method. The English progressive construction and perfective construction are called 'aspects.' Each aspect shows how the situation is perceived in a designated tense. The ultimate acquisition of English aspect is difficult for Japanese learners because verb types differ in their behavior, as well due to L1 transfer from the Japanese verb conjugation 'teiru.' First, we reviewed the literature on tense and aspect from home and abroad. Then, we developed an audio-visual teaching material for the English progressive and conducted experimental lessons which proved the effectiveness of our material. Based on feedback from the subjects of our study and researchers at overseas academic conferences where we presented our papers, we amended our material.

研究分野：認知言語学

キーワード：英語教育 認知言語学 時制・相 e-learning

1. 研究開始当初の背景

平成 23 年度から 26 年度まで科学研究費助成金を受けて英語句動詞の研究を認知言語学の視点から実施していた。実践授業の中で、日本人英語学習者の多くが英語時制・相の概念をきちんと理解できていないことが判明した。具体的には、平成 24 年度研究で 'in' 'out' と基本的な動詞である 'go' 'come' 'take' 'bring' 'break' 'put' を組み合わせた英語句動詞の授業を行い、授業後の自宅学習課題として日本語を与えて句動詞部分を埋めて英文を完成させるプリントを配布した。この宿題プリントのエラー分析を行ったところ動詞のエラーが多く、英語動詞の理解を深める必要を感じた。日本人大学生である英語学習者の多くが現在形・過去形という時制区分と単純形、進行形、完了形という相とを混同していることが観察されたためである。

英語の時制は現在時制と過去時制の 2 種類であり、それぞれの時制における状況を単純相、進行相、完了相という 3 つの相で表す。動詞のタイプによって進行相が用いられない場合や進行相を用いると特殊な意味に解釈される場合など複雑である。さらに、英語の教科書では時制と相の区別をつけずに「現在形」、「進行形」、「過去形」など別々の単元で扱われるために学習者の混乱を招いていると考えられる。さらに、学習者の母語である日本語と目標言語である英語との時制と相の概念構造の違いも原因と考えられる。日本語「～ている」は、進行中の動作、完了、結果状態を表す場合にも使用されるため、英語の時制と相は日本人学習者にとって習得の難しい文法項目の 1 つと言える。

2. 研究の目的

本研究は、日本人英語学習者の英語時制と相の理解を深めるため、認知言語学で提示されている時制・相のスキーマ表示（意味に不可欠なイメージ）とフレーム（意味を理解させるための実例・背景）を基にした学習者参加型の動画による教材を開発し、学習者が直接、言語経験・気づきをすることで帰納的に文法規則を自ら築いていく「動的用法基盤モデル」Langacker (2002) を応用した英語学習教材と教授法の開発を目指した。

Langacker R.W. (2002). *Concept, Image, and Symbol*, Mouton de Gruyter, Berlin/ New York

3. 研究の方法

(1) 平成 26 年度（文献研究および動画教材の作成）

国内外の英語時制・相に関する先行研究を文献調査して研究の概要を固めた。その後、英語母語話者の協力を得ながら「文法容認度調査」と「英文読解と内容理解の設問」を日本人大学生に実施した。英語時制・相に関する先行研究では、動詞のタイプ別指導の必要性和日本語「～ている」の干渉について指摘されていた（大里 2012）ため、「活動動詞」、「状態動詞」、「到達動詞」それぞれを同数含む英文を作成した。

「文法容認度調査」は、日本人英語学習者の英語相の理解度を調査するために実施した。与えられた英文が文法的か文法的でないかを学習者が判断するもので、「活動動詞」が最も理解されやすく、「状態動詞」と「到達動詞」の結果が悪かった。これは先行研究の結果とも一致する。「英文読解と内容理解のための設問」は、統制群の学習者用教材として作成し

た。実験群で用いる動詞と同じものを英文読解教材の中に組み入れた。実験群用には動詞タイプ別に動画教材を作成した。活動動詞は 'sew'、状態動詞は 'know'、到達動詞は 'reach' を使用した。それぞれ動画で状況を設定して実践授業の準備を整えた。

大里泰弘 「日英語アспектに関する一考察」長崎ウエスレアン大学現代社会学部紀要
10 巻 1 号 pp.31-38.

(2) 平成 27 年度 (実践授業の実施)

英語単純形と進行形を組み合わせた教材・教授法の完成を目指した。4 月にはレベル分けテストを実施し、5 月～6 月にかけて視聴覚教材を用いた授業 (実験群) と従来型の読解プリントを使用した授業 (統制群) を実施して統計的に処理した。実験群の事後テストの伸びが良かったという結果を 7 月に開かれた国際認知言語学会で発表したところ、実験群と統制群の教材が違いすぎるのは効果に影響を及ぼす可能性があるという指摘された。ただし、作成した動画教材自体は「わかりやすい」と高評価であった。

(3) 平成 28 年度 (教材の修正および第二回、第三回実践授業)

平成 27 年度の第一回実践授業で指摘された統制群教材の不備を修正した。統制群の教材は動画教材と同じ状況、同じ動詞を用いたプリントを使用した。第二回実践授業は修正した教材を用いて 6 月に実施した。1 日目は事前テストの後、ペアで話し合っ

た。実験群の学生には動画教材を視聴させてプリントの練習問題を解かせた。統制群の学生は別室で授業を行った。1 週間後に事後テストを行い、統計的に処理した。結果として 2 つのグループで優位差が出なかった。原因としては、すでに塾などで到達動詞について学んでいた学生がいたことや、解答が選択式だったために真の理解度が測れていなかったことが原因と分析した。

真の理解度を見るため、第三回実践授業として、文完成タスクを 7 月に別の学生に事前テストと事後テストとして実施した。状況を与え、動詞の部分を空欄にして学生に動詞を活用させて英文を完成させた。活動動詞と状態動詞の伸び率は少なかったが、到達動詞には効果が見られた。

4 . 研究成果

本研究の意義・重要性として 3 点挙げられる。

(1) 従来の時制・相に関する研究は一言語のみのものが多く、二言語を扱う場合でも単なる比較に終わっていて、日本人英語学習者を対象とした実践研究は少ない。さらに動画と音声が一体となった視聴覚教材を用いた研究は貴重である。

(2) 動画を一方的に視聴するだけでなく、途中でクイズに答えたり、様々な文例からルールを探し当てるなど、学習者参加型の教材となったことは意義深い。

(3) 選択式解答だけでなく、空欄補充のプロダクションを行わせることで学習者の真の理解度を測ることが出来、その結果、本教材が到達動詞の学習に特に効果的であることが実証された。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計 7 件)

松谷明美 (2017)

‘ Illocutionary Force of Passives in Present Tense Dialogues ’ 高千穂論叢 51 巻 pp.1-13. 概要のみ査読有

高橋千佳子、松谷明美 (2016)

‘ Sentence Completion Tasks on English Progressive, ’ *Proceedings of 9th International Conference of Education, Research and Innovation.* pp.7833-7840. 概要のみ査読有

高橋千佳子、松谷明美 (2016)

‘ An Empirical Study on Acquisition of English Progressive, ’ *Proceedings of 3rd International Conference of Language, Literature & Society* pp.153-159. 概要のみ査読有

高橋千佳子 (2016)

「看護系英語論文ディスコースに見られる現在完了受動態の役割 認知言語学の視点から 3 論文の分析 - 」東京純心大学看護学部紀要 第 1 巻 pp.47-54. 査読有

松谷明美 (2016)

‘ Tense and Rhetorical Questions with multiple Wh-words, ’ 高千穂論叢 第 50 巻(1) pp.285-296. 概要のみ査読有

高橋千佳子 (2015)

「日本人学習者の『英語進行形』習得に関する一考察」東京純心大学紀要第 19 号 pp.69-77. 査読有

松谷明美 (2015)

‘ A Study on Derivation of Rhetorical Questions from a Pragmatic and Acquisition Perspective, ’ 高千穂論叢 第 49 巻 pp.35-48 概要のみ査読有

[学会発表](計 4 件)

原田依子、相澤一美、市毛洋子、高橋留美、高橋千佳子 (2017)

「語彙と文法のインターフェイス：名詞の理解が文解釈に与える影響について」JACET 英語辞書、リーディング、英語語彙合同フォーラム 早稲田大学 2017 年 3 月 4 日

高橋千佳子、松谷明美 (2016)

‘ Sentence Completion Tasks on English Progressive, ’ ICERI, 9th International Conference of Education, Research and Innovation, スペイン、セビリア 2016 年 11 月 14 日

高橋千佳子、松谷明美 (2016)

‘ An Empirical Study on Acquisition of English Progressive, ’ 3rd International Conference of Language, Literature & Society, タイ、バンコック 2016 年 1 月 18 日

松谷明美 (2014)

‘ A Study on Derivation of Rhetorical Questions from a Pragmatic and Acquisition Perspective, ’ ホノルル、ハワイ 2014 年 6 月 20 日

[図書](計 0 件)

[産業財産権]

出願状況(計 0 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況（計 0 件）

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究代表者

高橋 千佳子 (TAKAHASHI, Chikako)
東京純心大学・看護学部看護学科・教授
研究者番号：80350528

(2)研究分担者

松谷 明美 (MATSUYA, Akemi)
高千穂大学・人間科学部・教授
研究者番号：60459261

(3)連携研究者

なし

(4)研究協力者

なし